

「大和ちゃん」【艦
シヨート！】

春宮 祭典

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

艦これSS集、「艦ショートこれくしょんvol. 1」に収録予定のSSのサンプルです。

鳳翔さんと大和の艦娘候補生時代の出会いから艦娘となった二人までを描いた日常ストーリーです。

いつぞやの観艦式にて鳳翔さんが大和の事を「大和ちゃん」と呼んでいることを知って、急いでプロットを仕上げたものです。

目次

サンプル 1	1
サンプル 2	8

サンプル1

今日もいつも通り、7時に目が覚めます。

冷蔵庫から作り置きのおかずを取り出して、順番にレンジへ。お米は炊飯器のタイマー機能で、もう炊けています。全部のおかずが温まったら、たった一人の食卓に並べて朝食をとる。食べ終わって洗い物を済ませたら学校の準備を——ああ、そう言えば、学校からは一週間のお休みを貰っていました。部屋着のまま部屋で一人、空母の皆さんから送られてきたメッセージに返信しましょうか。

「はあ……驚くほどの無趣味ですね、私」

お昼までの行動を思い返してみても、これだけで片付いてしまいます。これ以外に何をしていたかと言えば、今のように、食卓に半身を預けてぼーつとしているくらいです。普段は学校で一日のほとんどを費やしていますし、休日でも夕方遅くまで弓道部の皆さんと練習しています。

「部活もしてはならない、とは一体何があったのでしょうか？」

一応練習メニューは加賀さんに伝えていきますので問題ないとは思いますが、やはり、気になるものは気になってしまいます。ですが、それより、何よりも。

私、鳳翔の無趣味さにこれからどう過ごそうか、今から気が滅入ってしまったところとが一番の問題なのです。他の皆さんのようにゲームセンターや、カフェなどに足を運べばいいのですが、今までそういうことがなかったものですから、どうしていいかわからないのです。こんな事なら飛龍さんのお誘いに一度くらいは応じておくべきだったのかも知れません……

ピンポン。

「ひゃいっ!?!」

突然、来客の告げるチャイムが鳴って、驚いてしまいました。誰も見ていなかったかあたりを確認しますが、当然、この部屋には私しか居ませんでした。ほっ、と胸をなでおろすと同時に、先ほどの行動が恥ずかしくなってしまう、ため息がついていると、

「鳳翔候補生。居るか」

外から聞こえてきた問いに、私の体が緊張します。鳳翔候補生、とは私のことです。

現在の海軍に所属する艦娘は襲名制のようなもので成り立っていて、同じ時期に同名の艦娘が在籍しないように、次の艦娘となる私たちを候補生と呼びます。私たちは艦娘の養成学校で学び、襲名中の艦娘が除籍されると、名前を受け継いで艦娘になります。

私は鳳翔候補生です。その名の通り、軽空母鳳翔の候補生となります。ですが、現在現役の鳳翔はこの日本にはいません。はい、残念ながら今年の夏に……いえ、今はそん

な物思いに耽つてゐる暇は無いのでした。

「鳳翔候補生、参りました。ご用件とは何でしょうか？」

ドアを開けて、来訪者が軍の人間だとわかつたので、手を後ろに回して応対します。階級章的には中佐あたりでしょうか。私達艦娘には階級のようなものはありません。なので私は、基本的に軍の関係者の方々には敬語で対応するようにしています。

「率直に言おう。本日より、鳳翔候補生にはこの部屋で他の候補生と同居してもらう」
「……え？　そ、それは、どういう——」

「部屋は空いているな？」

「は、はいっ」

有無を言わさぬ中佐の迫力に、思わず返事してしまいましたが、幸いにもいくつか、何も置いていない部屋があります。中佐はそれを聞いて満足そうに、「うむ」とうなずき、恐らく通路の奥で待機していたのでしよう、そちらへ向いて「来い」と一言だけ発しました。

コツ、コツと靴が通路の床を叩く音が聞こえます。新しい空母の方でしょうか、それとも巡洋艦や駆逐艦でしょうかと、意味のない予想を浮かべながら、私は候補生の到着を待ちました。何しろ、ドアの前の大柄な中佐が居るのですから、首を出して見るわけにもいきません。

「あつ——」

中佐がスツと体をずらし、新しい候補生が私の目の前に立ちます。背丈は私より少し低い位でしょうか。それでもその存在感は私を圧倒する程神々しいものがありました。桜の花びらが舞い散る錯覚を覚えつつ、目の前の候補生が口を開くのをじつと待ちます。

「——」

一つ息を吸って、まだ少しぎこちない動作で海軍式の敬礼。たどたどしくも美しく、あざとくも凛々しい姿に、彼女の将来の姿が今から幻視されてくるようです。実のところ、この時点で私は目の前の彼女が何の候補生なのか、ある程度察してしまっていました。

「戦艦、大和——の、候補生、です。どうぞよろしく願います、鳳翔さん」

まだ寒いというのに、心地よい一陣の春風が吹いたような気がしました。私は何も口に出せないまま、目の前の彼女から目を離せませんでした。そこにいつも通りのぶつさらばうな声で中佐が割って入ります。

「彼女は我らが日本の希望の旗となる存在だ。だから候補生の中でも信頼のある貴様に大和候補生を託す。来週から艦娘養成学校の中等部に編入予定だ。来週まで貴様には休暇を与えているな」

「は、はい」

「その期間を利用して大和候補生に色々教えてやれ。その為の休暇だ」

「り、了解しました」

中佐は「ふん」とだけ鼻を鳴らすと、そのまま去っていきました。彼は昔から必要なこと以外を口に出すことが嫌いでした。なぜこんなことまで知っているかと言うと——ええ、一種の腐れ縁です。

そして後には玄関で借りてきた猫のようにきよろきよろとあたりを見回す彼女と、突然の同居人にどうしたらいいのか戸惑っている私が残されました。

「あ、あの……」

「は、はい、何でしょう?」

「その、お名前は……?」

「あ、そうでしたっ。私が名乗ってませんでしたからね。私は軽空母鳳翔の候補生です。これから不安なこともあるでしょうけれど、遠慮なく私を頼ってくださいね?」

「鳳翔さん、ですか。これから、どうぞよろしくお願いします」

ペこりと頭を下げる彼女ですが、その丁寧な仕草は同時に聞こえた「くくきゆるる……」という音にかき消されてしまいました。

「あつ……これは、その……」

「……もうお昼時ですからね。とりあえず荷物を部屋に運びましょうか。私はその間にお昼ご飯、作ってますから」

「はい……すみません……」

「これから一緒に暮らすんですから、遠慮はいりませんよ。あ、左側の部屋が空き部屋になってます」

これからの自室となる部屋に消えていく彼女を見送った後、私はいつもより分量の多い二人分の昼食の準備に取り掛かりました。なんだかそのことが私にはとても嬉しいことのように感じられました。

「おいしい……これおいしいです！」

「そうですか。それはよかったです」

目をキラキラさせて炒飯を頬張る姿はこれまでの大人びた、凛々しい振る舞いとは違った、年相応の様子で、少しほほえましい気分になりました。しかし、流石は超弩級戦艦ですね。多めに作っておいたのですが、あつという間に無くなってしまうました。

俗っぽい言い方になってしまいますが、なんだか妹ができたみたいですね。

「……これからよろしくお願いしますね、大和ちゃん」

「はいっ」

私たちはすっかり打ち解けて、大和ちゃんは早速率先してお手伝いをしてくれます。

「あ、私拭きます」

「あら、ありがとうございます」

ええ、本当に、これからの生活が楽しみになりました。

サンプル2

「あつ、鳳翔先輩！聞きました？ 中等部の戦艦クラスに新入生が入ったんですよ！」

一週間の休暇を終えて、久しぶりに弓道部に顔を出した私を見つけて真っ先に掛けてきたのは、一年後輩の飛龍さん。いつも二番艦の蒼龍さんと一緒に居るのですが、今日は一人でどうしたのでしょうか。

「あ、蒼龍ですか？あの娘、まだお昼食べてるんですよー。お弁当作り過ぎたみたいで。本当に、毎日そんなに食べてたら太るぞー、って。まあ、あの娘の場合、栄養は全部胸に行くんですけどねー。って、そんな事を話に来たんじゃないんですよ。なんとその候補生、あの戦艦大和の候補生だったんですよ！」

「あ、はい。一週間前に中佐が私の部屋にいらつしやって、その事は聞かされていますよ」

「へー。流石は大本営から最も信頼される候補生、鳳翔先輩ですね……」

「あ、そうです。それとですね、私と大和ちゃん、同じ部屋で暮らす事になったんですよ」

「あら？どうして飛龍さんは口を「あ」の形にしたまま固まっているのでしょうか？」

「それですね、この間飛龍さんが言っていたカフェの事を教えていただき——」

「ちよちよちよつと待つてくださいいよ!」 鳳翔先輩が? あの和候補生と、同居ですか!」

「え、ええ。上からの命令で……」

「てつきりあの大和だから、物凄いいお屋敷とかに住んでるかと思つてましたよ。意外だなあ、鳳翔先輩と同居なの——ぎやつ!」

今度は口を「へ」の時にしたまま固まつてしまいました。あら? 飛龍さんの頭に手が……

「それは先輩を馬鹿にする発言とも取れるわよ、二航戦」

「いっただい! 痛い! 力強いから! ……んもー、居るなら先に言つてよ、加賀あ」

「貴方の失礼な発言が頭にきたから背後から奇襲しただけよ。飛龍も部活前なんだから少しは落ち着きなさい」

加賀さんも一年後輩です。一応、私が先輩という事になつてますけれど、その才覚から、2年目になつた今年には既に卒業が予定されていまして、3代目の正規空母加賀として襲名されませぬ。

私なんかよりずっと戦いは上手いのに、ずっと慕つてくれているありがたい存在ですね。

「加賀さん、赤城さんが見当たりませんが、今日はどちらに?」

「赤城さんは……いつも通りまだ昼食から戻りません。もう10分もすれば来るとは思いますが」

「そうですか……お二人共相方が昼食遅刻ですか……」

「本当にすみません……」

蒼龍さんと赤城さんは、理由こそ違えど、昼食で遅れてくることが多いです。しゅん、とした様子で謝るお二人を宥めてから、私はいつもの様に部活動を始めます。

「赤城さんも蒼龍さんもすぐに来るでしょうし、私達は一足先に練習を始めましょうか」
「その方が建設的かと」

「はい。では、いつも通りに瞑想から——」

そう言えば、結局飛龍さんからカフェの場所を聞いてませんでしたね。また明日、会った時に聞きましょうか。